

もくじ

近代千住の俳人 岡本機柳の歩んだ道… P1

作家皆川行人について②… P3 明治九年御巡幸御用扣(中)… P4



【図1】岡本機柳色紙「天の川地上の恋は醜くかり」 / 【図2】岡本機柳の肖像（昭和20年代）

足立史談

第701号

2026年7月15日

足立区立郷土博物館内

足立史談編集局

〒120-0001

東京都足立区大谷田5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562

おかもと きりゅう

近代千住の俳人 岡本機柳の歩んだ道

伊藤 早穂子

■芭蕉に連なる俳人の発見 岡本機

柳は、昭和初期から昭和四十年代にかけて千住で活躍した俳人です。以前からその存在は確認されつつも、来歴や活動の詳細については不明でした。しかし、令和七年(二〇二五)、機柳のご親戚から多数の機柳作品をご寄贈いただくに至り、調査を本格化する中で、来歴が明らかになってきました。

同年開催の特別展「千住宿四〇〇年」でも、ご親戚への取材や文献から明らかになった情報とともに機柳作品を紹介しました。今回はその内容を押さえつつ、展覧会終了後、新たに判明した機柳のあゆみや人間関係を解説します。

■機柳の来歴 機柳は本名を岡本慶(読み方は不明)といい、明治二十七年(一八九四)、日本橋の太物問屋に生まれました。

明治四十五年、機柳は十八歳の時に俳人・晋雪庵柳唄(しんせつあんりゅうがい、生没年未詳)の門人となります。大正八年(一九一九)には俳句結社「木聖吟社(もくせいぎんしゃ)」を主催、句誌『櫻(かわやなぎ)』の発行を始めました。柳唄が死去したのは、柳唄の師である其角堂田辺機一(きかくどうたなべきいち、一八五五―一九三三)に弟子入りします。その後、大正十五年に機一より立机(りつき・俳諧宗匠と

して独立すること)を許されました。さて、機柳には、三つ上の兄・伊之助(いのすけ)がいました。伊之助は、骨接ぎで知られる名倉医院(千住五丁目)で若い頃から助手として働いていました。のちに名倉医院の近所で、長期療養患者のための宿屋を営んでいた家の婿養子となり、千住に根を下ろします。

また、当時の名倉家当主で、俳人でもあった名倉彌一(なぐらやいち)は、機一やその師の其角堂永機(えいき)と親交を結びました。先後関係は不明ですが、日本橋に生まれた機柳は、俳句の師と兄の双方を通じ、名倉家として千住と関わりをもつようになったと考えられます。

機柳は昭和初頭までは墨田区向島で活動していましたが、昭和一〇年(一九三五)前後には千住に拠点を移したことが分かっています。

■作風と系譜 機柳の色紙には、張り子の虎や亀戸天神の鶯(うそ)といった民芸品、江戸東京野菜のひとつである谷中生姜など身近な素材が多く描かれています。現代の私達にも親しみを感じさせるユーモラスな作風です。

しかし、機柳は、松尾芭蕉の高名な弟子「蕉門十哲」の一人に数えられる俳人・宝井其角(たからい・きかく、一六六一―一七〇七)を祖とする伝統ある系譜に属します。この

系譜は、正岡子規が明治時代に主導した俳句・短歌の革新運動以後、「旧派」と称されます。機柳自身も、其角の別号「螺舎（らしや）」や、同じく其角の系譜を意味する「晋子（しんし）」を作品の中でしばしば名乗っており、自らの系譜を強く意識していたことがうかがわれます。

機柳に言及した俳句雑誌などでも、もっぱら旧派俳人として取り上げられています。他方で機柳は、「新旧の何れにも偏せず、現実を直視し不拔な詩魂と感覚によって、純風なる俳風を推進する」ことを掲げた俳句結社『黒耀』（主宰・向山古峽）の同人にも名を連ねています。

機柳の俳人としての立場や思想を一概に語ることは、現時点では難しそうです。いずれにせよ、明治から大正、昭和という激動の時代のさなかにあつて、機柳自身もまた、新旧の間を行き来する句作活動を行っていたと見ることでよいでしょう。

■機柳の弟子たち 俳諧宗匠として独立した機柳は、弟子や木聖吟社の

同人を多く抱え、東京東郊で活躍した様々な俳人と関係を構築していきます。昭和四十四年には東京都俳句連盟（都俳連）の顧問にも任命されました。機柳の門弟や木聖吟社の同人としては、次のような人がいました。

①為成菖蒲園（ためなり・しようぶ えん／善太郎）

明治四〇年（一九〇七）、千住河原町の青物問屋に生まれる。千寿第二小学校在学中に俳句に関心を抱き、機柳の手ほどきを受け句作を始める。その後高浜虚子と池内たけしに師事し、家業のかたわら積極的に句作活動を継続する。市場関係者を集め「やっちゃば句会」を創設した。昭和四十七年（一九七二）没。

②平松夕府（ひらまつ・ゆうふ／本名未詳）

明治三十九年（一九〇六）、現在の福島県いわき市生まれ。昭和四年に荒川区へ移り、建築士として働く。機柳に師事し、三十一年に立机し召門夕府と号する。四十三年四月から六十一年五月まで、荒川区俳句人連

盟会長、四十四年より都俳句連副会長を務める。

③清水瑞穂（しみず・みずほ／本名同じ）

大正元年（一九一三）、神奈川県中郡岡崎村生まれ。昭和五年句作を始める。十二年上京しホトトギスに入社、二十三年木聖吟社同人に推薦される。二十四年立机し、荒川にて春光俳壇を結成する。荒川区俳句人連盟副会長、都俳連常任委員（四十四年）、同常任理事（五十三年）。

この他にも、木聖吟社の一員となったり、機柳の手ほどきを受けたりした俳人として、十人以上の名前が文献上で確認されています。独立したのち、自ら句誌を創刊した人や、都や区の俳句連盟の幹部を務めた人も少なくありません。昭和期の俳句界にとって、機柳はなくてはならない存在だったと言えるのではないのでしょうか。

昭和五十一年（一九七六）、機柳は心不全によって八十一年の生涯を

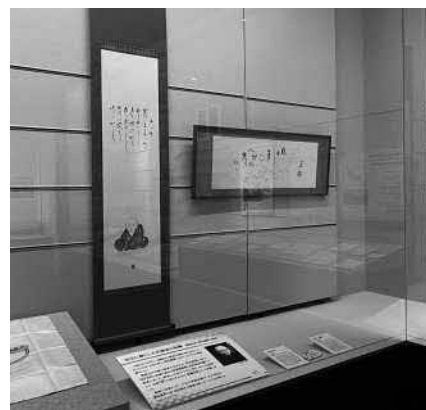
閉じました。寄贈資料の中には、昭和四十九年二月の句会で制作された色紙もあり、晩年まで句作に励んでいたことが分かります。

■企画展でも展示中！

機柳の作品は、江戸時代まで遡る千住の俳諧文化が、昭



【図3・4】岡本機柳短冊
「辛卯（昭和26年・1951）
御題に因なむ 機柳 初富
士うかべ朝空（あしたのそ
ら）の晴れ清し」/裏面
には「其角正統七世螺舎」の
文字が見える。



【図5】企画展示室の岡本機柳コーナー

和五十年頃まで脈々と受け継がれてきたことを示す貴重な資料です。当館で開催中の「収蔵資料展 個性光る、足立のいっぴんたち」（八月三〇日（日））でも、機柳の作品を展示しています。ぜひご覧ください。

【出典】

文芸新聞社編『俳句文学誌事典』（一九六五）／角川マガジンス『俳句研究 三六（一一二）』（一九六九）／俳誌せせらぎ『せせらぎ第五句集』（一九七三）／角川文化振興財団『俳句 二六（一四）』（一九七七）／平田拾穂編『現代俳句集成 第一巻』日本文芸編纂会（一九七八）／栗原春人・野村秋光子著『都俳連の夜明け』俳誌せせらぎ（一九七九）／平松夕府『全日本俳人叢書（四九）平松夕府集』近代文藝社（一九九〇）

（郷土博物館専門員）

作家皆川行人について ②

作品(第1回)

「雑魚」(上)

郷土博物館

前号で紹介した作家・皆川行人(みながわ・こうじん)の作品を今号からご紹介します。現行出版物が無いので『二十二篇』所収の三作品を順次紹介します。成立年月順ではなく、田山花袋の掲載順で紹介します。

「雑魚」(明治四〇年十月)

「学校の子」(同 四〇年 五月)

「土手通り」(同 四十一年十二月)

今回は「雑魚」(ざっこ)の第1回です。本作は計二回でご紹介致します。

なお読み仮名については紙幅の都合上(一)内に記しました。(編集)

雑魚

お幸(こう)が縄(なわ)を綱(な)って居る所へ、学校の山田先生がぶらりと来た。

「幸ちゃん大分勉強だな。」と先生は何時もの通り機嫌よく、「まっちゃんを一本お呉(く)れ。」「はあ。」とお幸は投げ出した膝(ひざ)を起して、傍(かたわ)らにならべてある

大箱を取って渡した。

先生は一本取り出して残りを袂(たもと)からは巻きたばこを出してすばすばつけた。

そして上り口へ腰を掛けて、眠むような髭面(ひげづら)をおっとりさせながら、何か話を見付けようとする。今日は神嘗祭(かんなめさい)で学校は休みである。

「親父(おやじ)はいないな。」

「父さあ雑魚をすくに行きましただ。」

お幸はそろそろ又縄を綱(な)い始める。

「それや何にするんだね。大分綱(な)ったじゃないか。」

「これだがね。これ草鞋(わらじ)を作るでさあ。」

「成程、晩に父さあが草鞋作る縄(な)かい娘を持つて親父は幸(しあわせ)だ。私が今に学校をしくじったら早速婿(むこ)に来るぜ。」

「おほほ、それや常談(じょうだん)でさあ。立派な奥(おく)さあがおいでなあに。」

「奥(おく)さあか。奥(おく)さは貧乏(ひんぱん)がきらいだ。はああ。」と先生は一人で笑つ

て、たばこの煙(けむ)りに寂しいのんきな顔を浮ばせる。

お幸は何やら分からず、「私(わたし)とは尚(なほ)貧乏(ひんぱん)だに。」と云つて又笑つた。

今日は朝から秋晴れである。もうかれこれ四時に近からうが、まだ大分暖(あつた)かい。先生はたばこを止(や)めて、懐(ふところ)から新聞を出して讀(よ)み始めた。

前の通りを都の学生が二人通る。

「先生さあ。」とお幸が呼びかけた。「なんだ。」

「先生さあ夜分(やぶん)かいつかお閑(ひま)があんなさるかね。」

「閑(ひま)は何時(いつ)でも閑だが、何だ。」

「私手紙を習(な)い度(て)えで、手本を書いて貰(もら)いますべいと思つて。」

「手紙を習(な)うのか。よろしい、其中(そのうち)に書いてやる。」と先生はにこにこして、

「手紙を習(な)つて健平(けんぺい)のとこへ遣(や)ろうつてか。」

「まあ先生の常談(じょうだん)もんでねえ。」とちよつと紅(あか)くなつてしなを作つた。

「健平は漢字(かんがく)が能(よ)く出来るから、お前も手紙位(くらい)習(な)わにや妻君(さいくん)になれん。」

「そんな事云うなら、もう書いて下さらねえでようござんさあ。」

「いや是非書いてやる。はあ、是非已(おれ)が習(な)わしてやる。」と立ち上つた。

「私どうすべし。先生まであんな事云うんだもの。」と可愛(かあい)らしいお幸が云い譯(わけ)云うのを、「あはは、まあ勉強するさね。」と云つて先生は帰(かへ)つてしまつた。

一人になった。お幸はそわそわしく土間(どま)へ下りて、家の隅(すみ)かち藁(わら)を持って来た。そしてそれを綱(な)おうとしたが、その手を止めて、漸(ようや)く暮(く)れ近い野の様子をじつと見た。やっぱり健平(けんぺい)を思つて居る。

家の前はまっ直(すぐ)な村道で、國旗(こっき)が一つ二つ遠くに見える。

東(あづま)へ少し行くとちいさな橋がある。其處(そこ)から先は浅(あさ)い流れが道の左を流れて居る。その流れのずつとさきにお幸の親父は雑魚網(ざこし)をかけて居る。

「どじようが入るべえ」とさつきから、見て居る男が尋ねた。もっこを担(か)いたのや、荷車(か)を引いたのや、五人立(ごにんたち)つて見て居る。

「どじようなんか仕方ねえ。雑魚が欲しいだが。」

「入つて見れや捨てるわけにもいかねえ。」

(後半は次回へ続く)

文字起し 博物館職員・伊藤雅美

【新収蔵史料紹介】

大久保家文書

明治九年御巡幸御用扣^(ひかえ)(中)

大石 瑞 樹

ねている人物たちは、大久保宗平（千住宿北組副戸長）や永野彦右衛門（同組頭）など、いずれも当時、千住の町政を担った役人でした。

【史料三・四丁目 翻刻】

記

第六九九号（令和八年五月刊行）に掲載された第一回では、「御巡幸御用扣」の概要と、昨年開催の特別展『千住宿400年』にて展示されていた部分（展開部九丁目裏・十丁目表）の解説を行いました。そこでは、主に行在所で用いた備品の規定について述べられていました。

今回は、巡幸前に行われた道路環境の整備について解説します。

■史料について

「御巡幸御用扣」は全二十四丁あります。最初に準備時の連絡の書付がほぼ時系列で書き留められており、次に数丁空けて実際の出勤控が記載されています。連絡の書付は明治天皇巡幸後も記述が続いており、所有者の大久保氏に関わった町内の諸事項についてのものと思われます。

■当時の道路環境について

今回取り扱う箇所は、明治九年（一八七六）五月十三日に作成された「記」です。担当方として名を連

清潔ヲ第一ニ主与して
恭敬可為仕候事

一、御当日有志之面々ハ三ツ組
五ツ組或ハ新規四斗樽掛ル
清水相備ひ、銘々宅前江
差出し置可申、尤何れも柄杓
可付置事

一、川砂ヲ以往還御先江砂敷
散し、精々清潔ニ可取計事
右夫々着手落成方可
取計事

擔当方 渡辺兵太郎

五月十三日 大久保宗平

川村次兵衛

永野彦右衛門

渡辺仁右衛門

早野清兵衛

同史料では、全十条に渡り、着手すべき整備事項が挙げられています。これらを機能の面からみると、①往還の利便性に関する項目、②公衆衛生に関する項目の二種類に大別できます。

まず往還の利便性に関する項目については、一条、二条、四条、五条がこれに該当します。

ここでは、天王社（素戔鳴神社、現荒川区南千住六丁目）前に樹木が出張らないよう枝を刈り取ること（一条）、道中の石橋の幅を通常の道と均等にするため、材木を左右にかけ、その上に青竹で手摺を取付け

ること（四条）など、天皇一行が快適に通行できるような整備を行うことが記されています。

対して、公衆衛生に関する項目は三条、六条、七条、八条、九条、十条が該当します。

第三条では、区内にある大小あらゆる便所について、不浄な臭気が出ないよう西洋の臭気止の方法を少しずつでも用いて清潔に注意するように求められています。また、第八条と九条では、当日、実行することが可能な者たちが行うべきことを定めています。具体的には、盛砂（土地を清めるために円錐状に盛られた砂）、あるいは自宅前への砂撒きを行うように（八条）、また、四斗樽に清水を備え、柄杓をつけてそれぞれの自宅前へ差し出すように（九条）、それぞれ求めています。

このように、当時の人々が天皇御巡幸に際して実行した整備からは、天皇が整えられた清浄な環境で休息と通行を行えるよう、細かく気を配っていたことが読み取れます。

今回は、出勤控を含む巡幸中の史料から、実際に巡幸時どのような対応していたかを見ていきます。

（続く）
（郷土博物館専門員）